

かささぎの渡せる橋におく霜の  
 白きを見れば夜ぞふけにける  
 かささぎの渡せる橋におく霜の  
 白きを見れば夜ぞふけにける

下すばめる



あき

下広がり

行 ポイント

「る」  
 ここから  
 を意識

楷 ポイント

左を長く出す  
 橋

味わう 大伴家持 (718?~785) は、三十六歌仙のひとり。本作にはふたつの解釈があり、ひとつは天の川を見上げ、天上の夜更けに想いを馳せたとする説。もうひとつは宮中の御橋を伝説の橋に例えたという説。

六

かささぎが天の川にかけるとい橋。冬の夜空を見上げると、その橋に白く霜が降りたようだ。天上の夜もすっかり更けてしまったのだな。

ちゅうなごんやかもち  
 〈中納言家持〉

付録▶ p16

奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の  
 声聞く時ぞ秋は悲しき  
 奥山に紅葉踏み分け鳴く鹿の  
 声聞く時ぞ秋は悲しき

右上がりに

一番長く

長く払う

あき

右上がりに

行 ポイント

「踏」  
 からまで一気に

楷 ポイント

スツと細く入る  
 払い上げる  
 踏

味わう 猿丸大夫 (生没年不明) は、三十六歌仙ながら、確実に詠んだと言える歌は一首もない。本作も『古今集』では「よみ人知らず」とされる。散り積もった紅葉の鮮やかさと鹿の声の対比で、晩秋の寂しさが際立つ歌。

五

奥深い山の中で、散り積もった紅葉の葉を踏んで鳴く鹿の声を聞くときほど、秋がもの悲しいと感じることはない。

さるまるだゅう  
 〈猿丸大夫〉

付録▶ p16